

指輪やネックレスの中で輝く宝石、建物の壁や石垣に使われている石材など、「石」は日常生活の中で目にすることの多い身近な存在です。こうした石を大地から削りとり、ほとんど手を加えずにおいたままにした原石、いわゆる石ころは、一体どのような姿をしているのでしょうか。その姿は博物館の収蔵標本から知ることができます。

人と自然の博物館には、兵庫県はもちろん、日本や世界の各地で採取された鉱物・岩石の標本が数多く収蔵されています。今回の展示では、これらの収蔵標本から見事な形や色彩をもつ鉱物の結晶、閉山あるいは休山した鉱山でかつて採取された貴重な鉱石、不思議な性質をもつ岩石（写真1）などを選び、「無機質でつまらない」というイメージをいだかれがちな石ころの美しさ、不思議さをお伝えできるよう工夫をこらしています。ここでは展示する標本の話題をいくつかご紹介します。



写真1
手で曲げることができる「こんにゃく石」

鉱物は美しい！

鉱物は、「天然に生成した一定の化学組成と結晶構造をもつ固体物質」と定義されています。有名なものでは、ダイヤモンド、ガーネット、トルマリンなど、宝石のほとんどが1種類の鉱物からできた石ころです。自然界に存在する元素は約90種類しかありませんが、その組合せや結晶構造の違いによって約5400種の鉱物が生まれています。現在でも毎年100を超える鉱物が新たに発見され、鉱物の種類は増え続けています。その中には、兵庫県朝来市の生野鉱山から世界で初めて発見された生野鉱（写真2）、櫻井鉱、ペトラック鉱も含まれています。



写真2
生野鉱（赤矢印で示した鉛灰色の部分）

鉱物標本の最大の見どころは、結晶が見せるその美しい形です。まるで機械で削り出したかのように規則的な自然の形には、人工的にカットされた宝石とは違う魅力があります（写真3）。

鉱物標本の魅力には、色彩もあげられます。蝶や花の温かみを感じさせる色とは異なり、鉱物の結晶は、どこか涼しげです。今年の夏は、暑さで疲れた頭を涼しげな鉱物の結晶を眺めて癒やしてみたいはいかがでしょうか。



写真3
無色透明の水晶、黒色の閃亜鉛鉱、金色の黄鉄鉱

岩石もいろいろ

ひとつの鉱物が、博物館の標本にできるほど観察しやすい大きさになることはまれです。石ころといえば岩石の方がより身近な存在ではないでしょうか。岩石は、鉱物や火山ガラスなどの集合体です。石材として有名なみかげ石（花崗岩）や大理石（結晶質石灰岩）、大谷石（緑色凝灰岩）は、どれも岩石です。地殻変動の激しい日本には、狭い国土に多くの種類の岩石が分布しています。そのため、「その辺りに転がっている石ころ」という表現から連想されるものは、みなさんの出身地によってそれぞれ違うかもしれません。展示をご覧になりながら、ご家族あるいはご友人となじみのある岩石がどれか話し合ってみるのもよいでしょう。

岩石のでき方は、水に運ばれて海底にたまった泥や砂が固まる、火山から噴出した溶岩や地下深くのマグマが冷え固まるなど、さまざまです。死んだ生物の殻や骨が積み重なってできる岩石もあり、このような岩石には多くの化石が含まれています。今回は、化石を含む岩石を切断・研磨して、内部の化石が観察しやすいように処理した標本（写真4）も多数展示します。

展示期間中には、研究員が参加者と一緒に見学しながら解説する「ギャラリートーク」や、この展示に関連したイベント「標本のミカタ～コレクションから新しい発見を生み出す～」も開催予定です。ちょうど夏休み期間ですので、お子さんの自由研究の題材探しに活用していただくのも大歓迎です。展示の見学とともに、イベントにもぜひご参加ください。

生野 賢司（自然・環境評価研究部）

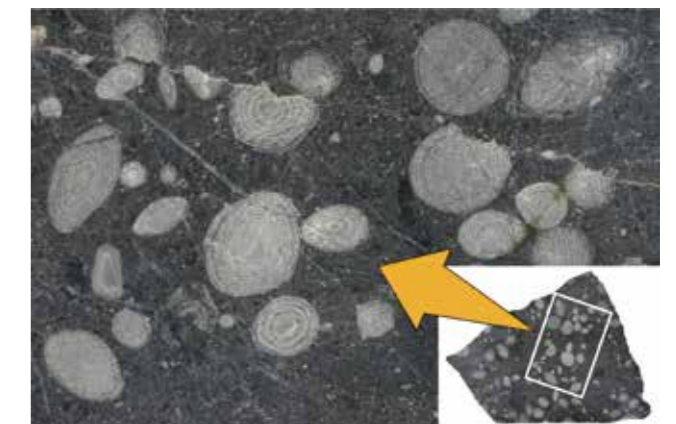


写真4
多数のフズリナ化石（白色部）を含む石灰岩